

#### W4-1 高度進行食道癌における長期生存予知因子の検討

九州大学第二外科

北村 薫、荒木貢士、川口英俊、佐伯浩司、江頭明典、池田陽一、大野真司、杉町圭蔵

【背景】食道癌は、診断時すでに進行していることが多く、たとえ切除しえても再発・転移を来して比較的早期に死亡することが少なくない。しかし一方で、高度進行例にもかかわらず、予期せぬ程長期生存が得られる症例が存在するのも事実である。【目的】遠隔転移のないstage III・IVの進行食道癌切除例における5年以上生存した症例を解析し、長期生存の予知因子があるか否かを検証することを目的とした。【対象と方法】(1)1965~93年に九州大学第二外科でstage III・IVと診断されたM0食道癌切除症例460例中、5年以上生存した50例を対象とした(長期群)。教室におけるstage III・IV全体の平均予後年は2.11年で、これ以前に癌死した264例を対照群(非長期群)として比較した。(2)治療前の生検標本を用いてp53蛋白(DO7)、Ki-67抗原(MIB-1)の免疫染色を行い、臨床病理学的背景因子と併せて検討した。

【結果】長期群では女性が13例(35.1%)であったのに対し、非長期群では38例(16.8%)と、前者では有意に女性の頻度が高かった( $p=0.0413$ )。深達度別には、a3が長期群では9例(18%)と、非長期群の111例(42%)に比して有意に低く( $p=0.0024$ )、n2以上が前者で44% (22/50)であったのに対し、後者では67.8% (179/264)と、長期生存例ではリンパ節転移n0~n1までのものが過半数を占めていた( $p=0.0011$ )。さらに深達度とリンパ節転移の面から両群を比較すると、まずa2・a3のうちn2~n4を示した症例は、長期群では28.9%であったのに対し、非長期群では62.9%にみられた。一方、n2~n4の転移を有した症例における深達度をみると、長期群ではmp、smが36.4%と、非長期群の16.8%に比して外膜非浸潤例が多かった。非長期群の中にも、表在癌であるsmが7例みとめられたが、いずれもn2以上であった(n2、n3が各3例、n4が1例)。235例(74.8%)に何らかの術前治療が施行されているが、組織学的著効(Grade 3)が得られた頻度は非長期群では6.1%であったのに対し、長期群では22%と後者で高かった( $p=0.0014$ )。免疫組織学的検索では、Ki-67高発現(30%以上)の頻度は両者で差がなかったが、p53陽性率は長期群が10%に対して、非長期群は41.5%と長期群にはp53陽性例が少ない傾向がみられた( $p=0.051$ )。【まとめ】高度進行食道癌における長期生存例の特徴として、1.女性の頻度が高い、2.他臓器浸潤例の頻度が低い、3.深達度が深くてもnはn0~n1のものが多い、4.術前治療施行例においてGrade3の頻度が高い、5.p53蛋白陽性率が低い等が挙げられた。このように、高度進行食道癌の予後予知は一因的には困難であり、個々の症例における多面的な悪性度評価と、適切な集学的治療が必要であると考えられた。

#### W4-2 Stage IV 胃癌長期生存例の検討

富山医科薬科大学 第2外科

齊藤光和、坂本 隆、吉野友康、湯口 卓、野本一博、横山義信、濱名俊泰、齊藤文良、井原祐治、山下 巖、榊原年宏、田内克典、清水哲朗、沢田石勝、塚田一博

【目的】診断技術の向上に伴い、胃癌も早期のうちに発見され治療が行われるようになってきたが、進行癌で発見される例も少なくない。そのうちStage IV胃癌症例の予後は極めて不良である。今回われわれはStage IV胃癌症例、特に長期生存例について検討したので報告する。

【対象】1979年10月より1997年12月までに当科で経験した胃癌症例は1038例であり、そのうち総合StageにてIVと診断された204例を対象とした。

【結果】Stage IVaは26例、Stage IVbは178例であった。Stage IVaのStage決定因子をみると、P1H0T3以下n0~n2が6例(23.0%)、t4n2が8例(30.8%)、t3n3が8例(30.8%)、POH1t1~t3n2以下が4例(15.4%)であった。

Stage IVbでは、n4が47例(26.4%)、P2、P3が45例(25.3%)、H2、H3が18例(10.1%)、その他が68例(38.2%)であった。

Stage IVaのうち生存期間が1年未満であった症例は11例(42.3%)とその半数を占めていた。生存期間が5年以上は5例(19.2%)であり、5生率は23.1%であった。根治度Bの手術を行った症例の5生率は30.0%であったが、根治度Cでは0%であり有意の差が認められた。

Stage IVbのうち生存期間が1年未満であった症例は126例(70.8%)とその大部分を占めていた。生存期間が5年以上は3例(1.7%)であり、5生率は1.9%であった。

Stage IVaに比し生存率が低かった。根治度Bの手術を行った症例の5生率は4.5%であったが、根治度Cでは1.5%であった。

Stage IVaのうち、5年以上生存した5例では、Stageの決定因子はt4n2が1例、t3n3が3例、POH1t1~t3n2以下が1例とP1は認めず、H1因子が1例のみであった。5例すべてに根治度Bの手術が施行されていた。全症例において何らかの免疫化学療法が行われていた。

Stage IVbのうち、5年以上生存した3例では、Stageの決定因子はn4が2例、P2、n4が1例であった。根治度Bの手術が1例、根治度Cが2例であり、根治度Cでも5生例が認められた。全症例において何らかの免疫化学療法が行われていた。

【結論】Stage IV胃癌の長期生存例は、Stage IVaでは、Stage決定因子においてPおよびH因子の関与が低く、根治度Bの手術が行われた症例であった。このことよりStage IVaにおいては、TおよびN因子がStage決定因子ならば根治度Bの手術を目指すべきであると考えられた。

Stage IVbにおいては、根治度Cでも5生例が認められ、症例によっては無理な拡大手術は行わず、補助療法との併用で良好な成績が得られる場合があると考えられた。